

## 一次史料による砂防史の試み～「河井弥八日記」の発見と活用に向けて～

○宮内庁書陵部 内藤 一成  
 京都大学 奈良岡聰智  
 一般社団法人全国治水砂防協会 岡本 正男  
 同 原 義文

## 1 はじめに

河井弥八（1877～1960）は、昭和初期に侍従次長や皇后宮大夫をつとめた宮廷官僚、あるいは参議院議長にまでのぼりつめた議会政治家として知られる。だが、河井の事績はそれだけではない。砂防への取り組みも大きな柱の一つといってよい。河井は、1932年9月に帝室会計審査局長官に就任し、各地の御料林を踏査した頃から砂防への関心を強め、1940年には全国治水砂防協会（以下砂防協会）顧問となった。戦後は、治山治水議員連盟を結成、1947年には砂防協会理事長に就任した。政界引退後の1957年には副会長となり、亡くなるまでその地位にあるなど、大きな足跡を残している。

河井は生涯にわたり歴大な日記を書き残しており、侍従次長時代については『昭和初期の天皇と宮中』全6巻として刊行されているが、その他はいずれも未公開である。報告者は現在、戦後日記の解読に取り組んでおり、その内容が砂防の史的解明にも大きく寄与するものであることを確認した。よって今回はその一端を紹介したい。具体的には第二次大戦末期から終戦後にかけての砂防協会関係者の動きを中心にみていく。

## 2 大戦末期の情勢と砂防の衰退

第二次大戦中、砂防事業は停滞を余儀なくされた。軍需優先の状況のもと砂防工事は後回しとなり、森林は燃料用に伐採され、また食糧増産のため切り開かれるなどして荒廃が進んだ。戦時期の河井日記は、苛烈な状況下における砂防関係者の焦慮が伝わるものとなっている。そうしたなかで1945年4月に成立した鈴木貫太郎内閣に砂防協会顧問の岡田忠彦が厚生大臣として入閣したことは、関係者には好機と受け止められたようである。5月16日に開かれた協会晩餐会では「岡田厚相ヲ中心トシ砂防治水ノ国家事業ヲ一元スルノ件推進ヲ期ス」とあり、さらに同月25日には「赤木博士ヨリ明日ノ午餐会ニ於テ協議セラルベキ内務省国土局砂防係技術陣営ノ没落対策ニ関スル報告ヲ聴取ス。明日ハ内務政務次官窪井義道氏出席、小泉幹事長、牧野良一諸氏ヨリ意見ヲ聴クベシト云フ」とあり、砂防事業の衰退を食い止め、現状を改善しようとしていたことがみとれる。ところが皮肉なことに同日夜、東京に大空襲があり、砂防協会事務所も焼け落ちてしまい、

活動は逆に一層の後退を余儀なくされてしまう。

## 3 終戦後の砂防事業復活へ向けた動き

戦後の再興に向けた動きは赤木正雄によって起こされた。8月22日の砂防協会役員会では「赤木幹事長ヨリ砂防急施策樹立ニ関スル意見書ノ発表アリ、次回之ヲ決定スルニ決ス。勝、牧野、田中各代議士、徳川公、保科子、入江、次田、古島各議員出席ス」とある。9月8日には、河井・赤木が農林大臣千石興太郎を訪ね、先着の田中好（衆議院議員）とともに「砂防ノ実施ト関係官庁ノ統合トヲ力説」している。

さらに10月、協会顧問の次田大三郎が幣原喜重郎内閣の国務大臣・内閣書記官長に就任したことは関係者を活気づけた。11月30日には「赤木正雄博士来訪、西原亀三氏ノ意見書ヲ示サル。又水政局又ハ国土省新設ニ付意見ヲ交換ス」とあり、翌日には「次田書記官長ヲ訪ヒ〔略〕又水政統一機関設置ニ関スル政府ノ態度ヲ問」うている。活動が最高潮に達したのは12月5日で、「五時築地喜久屋ニ於ケル次田国務相ノ晩餐会ニ出席ス。砂防協会員ノ若干名ヲ招カル。次田氏ヨリ水政報省設置ニ関スル閣議決定ニ付内話アリ。一同ハ宿念達成ノ時来ルベキヲ悦ブ。出席者ハ徳川家正公、大河内輝耕子、矢吹省三男、古島一雄氏、河井、勝正憲氏、小柳牧衛氏、

田中好氏及赤木正雄博士ナリ。八時半頃散会」とあり、政府内で省庁再編が議論されるなか水政省設置が閣議決定されたという報に沸き返っている。結果的に水政省は設置されなかったが、平和の到来とともに治水政策・事業の復活の気運が高まっていたことを窺うことができる。



河井弥八日記（1946, 5, 26～27）

#### 4 災害地視察の復活

こうした気運のなかで企図されたのが災害地の視察であった。この年9月17日に九州に上陸した枕崎台風は、その後中国、近畿、北陸、東北地方を通過し、各地に甚大な被害をもたらした。特に広島県では2,000名を超す死者・行方不明者を出した。このため災害地の様子を視察しようということになったようである。河井日記の関係記事の初出は11月9日の「貴族院調査課長河野書記官ヨリ予ニ対シ風水害視察ノ為広島山口島根三県へ出張センコトヲ照会シ来ル」であった。議員視察となった経緯は判然としないが、砂防協会に關係する議員や、次田内閣書記官長による働きかけが考えられる。その後、河井は12月19日には内務省を訪ね、砂防課長より「広島県水害ノ状況ヲ聴」くなど下準備に入った。視察が実際に行われたのは翌年5月で、同月18日に「赤木正雄博士来訪、二十二日出発広島山口両県ノ水害状況視察日程ヲ示サレ、同行ヲ求メラル。次田大三郎氏モ同行セラルト云フ」とあり、赤木の実質的主導を窺わせる。視察者三人の性格を確認すると、河井・次田は砂防に造詣の深い貴族院議員で砂防協会顧問、赤木は非議員で砂防の第一人者、協会常務理事である。視察日程は表1のとおり。

月日	視察内容
5月22日	夜 東京を出発
5月23日	午後 午後、尾道着、同地に宿泊
5月24日	午前 尾道市：栗原川貯水池堰堤工事 安浦町：野呂川に依る荒廢地
	午後 川尻町：小川光明寺川押し出しの跡、江の川土砂の放出 呉市：黒瀬川大荒廢
5月25日	午前 呉市：各地崩壊各所押出
	午後 広島までの道中における各河川 広島市：原子爆弾被害地
5月26日	午前 大野村：大崩壊地における陸軍療養所大破の状況 玖波町：玖波川の荒廢地、下流の復旧工事
	午後 宮島：厳島神社付近の土砂堆積状況
5月27日	午前 岩国市：東南部山溪崩壊の跡
	午後 玖波町：笹見川の荒廢状況 祖生村：別所畑なる地送り地 柳井町：姫田川の惨害
5月28日	午前 柳井町にて講演
	午後 帰路に就く

※河井家所蔵「河井弥八日記」をもとに作成

日記の記述は詳細で、その一部を紹介すると、市内各所で土石流が発生した呉市では「直ニ黒瀬川大荒廢ヲ見ル。右岸無石ノ溪流六アリ土砂ノ押出多量ナリ。水道給水塔付近ヲ遠望シ又脚下ニ露出セル導水管ヲ見ル。惨害頗多シ、修理ノ困難想フベシ」（5月24日）、同じく大規模な土砂崩れに見舞われた広島県大野村では「九時半大野村大崩壊地ニ於ケル陸軍療養所大破ノ

状況ヲ見ル。天然ノ威力驚嘆ニ堪ヘズ。軍關係ノ療養者及原子爆弾調査ノ為来リテ此所ニ宿泊セル学者、医師ノ死亡者多シト聞ケリ。大野村ニテハ砂防施工ヲ断レリト云フ」（5月26日）などである。

ほかにも広島県玖波町では「町長中野松一氏ノ案内ヲ得テ玖波川ノ荒廢地及下流ノ復旧工事ヲ視察」し、その際「下流ノ施工ヲ急キ上流崩壊地工事計画ナキニ驚ク」（5月26日）と上流の砂防対策を欠いたまま下流の工事のみが行われるという実態に驚き呆れ、山口県の姫田川視察時には「上流ニ一本ノ堰堤アリ能ク惨害ヲ防止シ得タルモ其下方ニ設営セルモノハセメントヲ欠キシヲ以テ側面ヨリ破ラレテ用ヲ為サス、土砂ハ進ンテ市街ニ堆積シタリ」（5月27日）と、砂防堰堤の効果に満足する一方で、下流に作られた堰堤の欠陥を指摘するなど興味深い記述が多い。

今回、報告者は河井日記の価値を確認すべく広島・山口両県の公文書館・図書館で調査を実施したが、戦後の混乱と、極度の物資不足を反映して、災害・視察とも關係する記録を殆ど見出せなかった。公文書では、わずかに県会の会議録の中に知事や議員の発言が散見される程度であった。公文書の残存および質的狀況は、原爆によって職員と文書の大半を失った広島県において特に深刻であった。文献についても確認したが、中国新聞は、45年8～9月はバックナンバーに欠落が多く、翌年5月についても、紙不足を反映して紙面が薄いため、いずれも關係記事を見出せなかった。また書籍のうち、自治体史等で枕崎台風の被害を取り上げたものは広島県土木部砂防課『昭和20年9月17日における呉市の水害について』（同課、1951年）を除けば、森本敏雄『玖珂町誌』（玖珂町役場、1972年）が若干触れる程度であった。このような中であって他では得られない貴重な情報を提供する河井日記は、歴史の空白に光を当てるものとして今後の活用が期待される。

#### 5 おわりに

以上、今回は未公開の戦後河井日記からごく一部を紹介したにすぎないが、詳細かつ貴重な記録であることが充分確認できた。とりわけ戦時中から戦後という時期は、記録の欠損が多く、存在しても内容的に希薄なことが珍しくないだけに、その価値は一層高まる。また同時期の砂防協会の歴史に関しても、前述のとおり協会は空襲で資料を焼失しており、赤木正雄『砂防一路』（全国治水砂防協会、1963年）を除けば、その多くが不明であることから、今後河井日記の解読が進めば、より具体的な歴史が確かめられよう。さらに日記は1946年12月の治山治水議員連盟の結成をはじめ、議会と砂防協会との關係についても実態解明の手がかりを与えてくれることになろう。

〔付記〕本稿は一般社団法人全国治水砂防協会助成、JSPS 科研費 25370790 による成果の一部である。